



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第29主日 A年(2023年10月22日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 45章1、4－6節

第二朗読：テサロニケの信徒への手紙一 1章1－5b節

福音朗読：マタイによる福音書 22章15－21節

皇帝のものは皇帝に

今日の福音朗読は、王子の結婚披露宴^{ひろうえん}（22章1－14節）のたとえ話の次にある出来事です。三つのたとえの後に、四つの論争^{ろんそう}がイエスと、敵対^{てきたい}する者との間に繰り広げられています。そのうちの最初^{かしよ}のものが今日の朗読箇所となります。

すでにファリサイ派は、安息日^{あんそくび}にいやしをおこなったイエスを見て、イエスを殺す相談を始めています（12章14節）。イエスがエルサレムに入り、神殿から商人を追い出すと、エルサレムの宗教指導者たちとの対立が激しさを増していきました。今日の朗読箇所ではファリサイ派の人々がイエスに罠^{わな}をかけるために、自分たちの弟子とヘロデ派を送り込む場面です。

17節の「適^{かな}っているでしょうか」に注目してください。このイエスさまへの問いかけには巧^とみな罠^{こうみょう}が仕組まれています。もし、税^{ぜい}を皇帝^{おき}に納めるべきだとすれば、ローマの支配^{みと}を認め、神以外のものを神とする不信仰者となります。つまり、ファリサイ派と敵対することになります。もし、納めなくともよいとすれば、ローマへの反逆^{はんぎやく}の徒^ととして訴^{うった}える口実^{こうじつ}となります。つまりヘロデ派と敵対することになるのです。

日常生活ではローマの硬貨^{こうか}を平気^{もち}で用いながら、納税問題^{けいけん}となるととたんに敬虔^{けいけん}なふりをすると彼らの偽善性^{ぎぜんせい}があると思います。そこでイエスさまは18節で「偽善者たち」と厳しく言います。

ローマの硬貨には皇帝^{ぞう}の像^{めい}と銘^{きざ}が刻まれていました。その硬貨を用いての納税は神格化した皇帝への崇敬^{すうけい}と同じです。神さま以外のものを崇敬することになり、神さまへの背信^{はいしん}行為^{こうい}となる

でしょう。

イエスさまに罍をかけようとする人々は日常の生活ではローマの硬貨を使っておきながら、ことさら納税になると信仰の問題を取り出していきます。口先では神さまを敬いますが、心は神さまから遠く離れる偽善者たちです。

9節の「皇帝のものは皇帝に」は有名な一句です。以下のような代表的な解釈があります。

- ①義務：皇帝のもの、神のものと並列にあることから、政治的なものと宗教的なものは一方が他方を否定するような排他的なものではなく、どちらにも義務があり、それを果たすべき。
- ②神に従う：両者は並列ではなく、「神のものは神に」が重要視される。国家権力は神に従うかぎりにおいて容認される。それ故、国家権力は神に服従すべき。
- ③支配の否定：皇帝のものはローマへの人頭税、神のものは神殿に納める神殿税。ファリサイ派は神殿税を納めることで神殿を支配した。そのファリサイ派が人頭税でイスラエルを支配しようとするローマを否定するのはおかしい。どちらも支配しているという点では共通だから。
- ④似姿：皇帝のものとは硬貨に刻まれた肖像（エイコーン＝似姿）を指し、神のものとは神の似姿（エイコーン）としての人間を指す。ローマへの納税も大切だが、それよりも大切なのは神の似姿として生きていくことだ。

皇帝のものを皇帝に返すのは至極当然なことで、納税問題については十分な答えとなります。しかし、ファリサイ派にとって人間が神のもの、神の似姿であることは眼中にはないようです。人間は神の似姿（創1章26節）であり、その心には「神のことば」が刻まれています（エレ31章33節）。自分が神に属していることに気づけば、神に仕えるものとなるのは当然なことではないでしょうか。

皇帝のものは滅び去ります。なぜなら、皇帝は頻りに代わるからです。しかし、人間が神の似姿に造られた真実と、人間の心に刻まれた「神のことば」は決して滅び去ることはありません。

お知らせ

来週の日曜日、10月29日は「ロザリオ祭」です。

アントニオ会館の庭でミサとなります。

ミサ後に軽食を用意していますので、一緒に楽しみましょう。

お弁当の持ち込みも、もちろんOKです。